

71

研医学会図書館所蔵の脈学書『切脈小言』について

吉岡 広記

日本鍼灸研究会

【著者】本書は、所謂「古方派」に連なると見られる東園先生の口授による脈学書である（Web公開）。東園の詳細は不明であるが、寛政6年（1794）の大田居仁（東園の門人、備前岡山藩の人、詳細未詳）序「居仁遊于吉子之門」、および同11年（1799）の米田嘉言（東園の門人、蔵印記「羽床／下村／米田」より丸亀著の人と知れるのみ）識語「於高城辺独有齊米田嘉言写之」から、『独有齋緒言』『韞蔵美玉』『折肱方花』『方私抄』（いずれも九州大学現蔵、筆者未見）を著した吉元中（おそらく津山藩の人）と推測される。

【成立の経緯】序によれば、「古医法」の一斑を教わった居仁が、いまだ詳しく教授されていない脈学についての講義を請い、東園がそれに応じて口説し、居仁が筆記して本書が成ったと言う。

【構成と内容】項立ては無いが、内容から①診脈部位（01a02～02b06）、②診察における脈診の位置付け（02b06～04b10）、③診察における緊要な事（04b10～06b02）、④脈證と脈状（06b02～12a02）、⑤身体部位（12a03～12b02）に分けられ、いずれも任意の典拠を示し、自説を述べる形式を採る。

①「釈名」「脈、幕也、幕絡一体」（『太平御覽』巻175・脈、現行の『釈名』に未見）、『靈枢』『脈会太淵』（『難経』45難の誤り）、『脈経』（巻1・第3）を引き、脈の意味と通説の寸関尺の位置、幅（『難経』2難と滑寿注）、蔵府配当を示した後、女子は「陰逆自上生下」として左を寸から命門・脾・肺、右を腎・肝・心とした褚澄（『褚氏遺書』平脈）、五蔵の位置から左を心・脾・肝、右を肺・脾・腎とした趙継宗（『儒医精要』）、左右寸関尺六部を全て肺脈とした呉草盧（『脈訣考証』蔵府部位より援引）の異説を挙げ、「紛々」と評す。

②周の医和（『左伝』昭公・元年）や宋の知録（『宋高僧伝』に拠るか）の脈診による死生吉凶を察した伝奇のほか、これに類する話をみな「妄誕」とし、脈の難明さを説いた東坡（『東坡志林』巻6ないし『宋文鑑』巻107）の言や『傷寒論』の「先症ヲ云テ次ニ脈ヲ云、或ハ症ノミ云テ脈ヲ云ワザル処多キこと、医書では「殊ニ脈ハ四診之末ト云」ことから、「望聞問ノ三診ヲ置テ先ツ脈ヲ診シテ精ク知ル理」は無く、「故ニ脈ヲ以テ精微ヲ云者ハ皆虚妄ナリ」と断ずる。さらに「三部之説ニ拘ハル者ハ古医法ヲ知ラザル者ナリ」とし、『傷寒論』の記述のうち「三部ヲ分チ、或脈ヲ以症ヲ分ツノ類ハ皆後人之附会ナリ」と斥ける。

③これを受け、「為医者ハ脈ノ大体ヲ識得」すればよく、緊要なのは「心腹ノ間ノ疾ヲ知ルコト」であり、それこそが「古医真法」と宣言する。その論拠に『史記』巻79・范雎蔡沢列伝と巻41・越王勾踐世家を挙げるも心腹の病を用いた譬え話に過ぎず、②で「妄誕」とした伝奇と大差なく恣意的な引用である。ともかく東園の言う「古医法」とは、症状の重視、とりわけ「心膈、脇、臍下、臍上、臍傍、小腹」の「心腹ヲ候フヲ先務」とし、「痞、痞塞、痞満、痞鞭、脹満、苦満、動悸、拘急、攣引、結実、急結、癥瘕」を察することである。また治方を考えるにあたり「理ヲ鑿チ空論臆断スルコトニ非ス、五色五味五行五蔵ニ拘ラズ、唯古人治疾トコロノ例ヲ推シテ映照シテ識得スベキ」として、中国の医学理論ではなく先人の経験を頼りとする。

④東園にとり「簡ニシテ初学ニ便」なる『中蔵経』脈要論と『石室秘録』（巻5・七論脈訣）を引き、気血盛衰や風寒暑湿、肥瘦などと脈状の関係を示し、『素問』（平人氣象論）より遅数と平人の脈を述べ、浮沈遅数四脈が基本であると主張する。また『傷寒論』の脈状表記から診脈の基礎は挙按であることと兼見脈かねみりみやくの見方を記す。最後に脈状には定数が無いため、「大概」として浮沈遅数緩緊滑滑虚実長短大小洪微散細起伏弦牢濡弱動促結代の29脈を挙げ、相類脈（『脈経』巻1・第1）を附記する。浮～微は「○ノ反」として相対に、散～代は相類に列べる（歴代の脈書と配列不一致）。①～③と異なり理論的である。

⑤上中下焦の頭から足に至るまでの配分、および『靈枢』肺腧を根拠に上中下三節と解せると言う孫一奎の説（『医旨緒余』巻上・難経正義三焦評）、頸項、胸膈、腋脇、臂肘、脛膝各々の区別について列記するが、寸関尺三部（上中下焦に対応）を否定し心腹をことさらに重視した前言に反する。